

[平成29年度 地域創造学賞]

着地型観光におけるホストとゲストの交流に関する研究 — 先行研究の盲点 —

豊澤 小百合

目 次

第1章 はじめに

- 1-1 研究の背景と目的
- 1-2 既存研究に対する疑問
- 1-3 本論文の構成

第2章 新たな観光形態としての着地型観光

- 2-1 本研究での着地型観光の定義
- 2-2 着地型観光のあけぼの
- 2-3 着地型観光が生み出す、人々への影響

第3章 着地型観光を展開するホストの姿勢

- 3-1 奈良県桜井市—桜井市観光まちづくり協議会の事例—
 - (1) 桜井市観光まちづくり協議会の概要
 - (2) 着地型観光を展開するホストの姿勢
— 当協議会の会長へのヒアリング調査結果報告をもとに —
- 3-2 先行研究とヒアリング結果との比較

第4章 着地型観光におけるゲストの行動の実態

- 4-1 奈良県明日香村あすか歴史探検隊の事例
 - (1) あすか歴史探検隊の概要
 - (2) 着地型観光におけるゲストの行動の実態1
— あすか歴史探検隊を経て —
- 4-2 京都府宇治田原町 Ujitawara tea Plantation の事例
 - (1) Ujitawara tea Plantation の概要
 - (2) 着地型観光におけるゲストの行動の実態2
— Ujitawara tea Plantation での体験交流を経て —
- 4-3 先行研究と事例分析結果との比較

第5章 総括

第1章 はじめに

1-1 研究の背景と目的

かつて、国内観光の観光形態は、団体旅行がその大半を占めていた。大勢の人々がある一定の有名観光地や娯楽施設に一斉に押し寄せるといった、都市部の旅行会社によるパッケージツアーがその中心的役割を果たしていた。しかし今日では、情報社会の到来と共に人々の興味・関心や趣味が多様化し、大勢で群を成しての行動ではなく、同じ興味・関心・趣味を持った少人数または個人での旅が国内観光の主流な形態として台頭してきている。人々は様々な情報メディアを活用して、旅行会社を通すことなく、自身で宿泊施設や交通機関の座席予約等を行い、個人で旅の全旅程を組み立てることが可能となった。時を同じくして、国内各地では、地域が主体となって誘客を図る、地域に根差した観光でより良いまちを目指す観光まちづくりが盛んに取り組まれている。

詳しくは後述するが、この新しい観光形態は、主に旅行会社では着地型観光と呼ばれ、これまで都市部に立地する旅行会社が主体となって作成していた旅行企画とは異なる、地域が主導する旅行企画と捉えられた。さらに、今日では、国内各地で地元で眠る魅力を再発掘し、それを活かして人を呼び込もうとする動きが地方で急速に高まっている。

その動きに合わせて、今、着地型観光に関する研究が盛んに取り組まれている。これまで、この新たな観光形態を地域づくりの一環として成功させるために、その舞台となる地域には何が求められているのかという疑問に対し、成功事例を用いて着地型観光の成功要因の分析等の研究が数多くなされてきた。そして、着地型観光を地域にとってより有効なものとし、成功させるためのポイントを公式化する動きが、数々の先行研究で見取れた。

例えば、着地型観光でのホスト・ゲストの関係構築に関する先行研究は、地域の事例を挙げる際、どうしてもその地域の観光事業に携わる地域住民の立場に立って、着地型観光を語ることが多い。しかし、観光地の中には、そこに自宅があるだけで、地域内で過ごす時間がほとんどない人や、地域内で暮らす時間がほとんどだけれど、観光事業には興味関心を抱いていない人もいるかもしれない。筆者は、自身がこれまで体験してきたフィールド活動での出来事と重ね合わせてみると、これまでの研究では、実態がまだまだ捉えきれないのではないか、あるいはホスト・ゲスト間の関係性について、もっと別の見方を見つめ直す必要があるのではないかという疑問を抱いた。

そこで本研究では、現在の公式化が進む着地型観光研究を、特にホスト・ゲスト二者の交流に注目し、実態を見つめ直す。そして、着地型観光事業の現場での、もてなす側ともてなされる側の間で交流が盛んに行われる瞬間や、観光プログラムにおける人々の姿勢・行動について、筆者がこれまでフィールド先で経験してきた事例や現役で観光事業に携わる人へのヒアリング結果から分析する。同時に、ホスト・ゲスト間の交流についての従来の着地型観光研究の成果を踏まえた上で現場の実態との比較を行う。つまり、事例やヒアリング調査結果から現場の実態を分析することに加えて、従来の研究で捉えられている部分とそうでない部分、いわば盲点を指摘し、着地型観光を考える上で必要とされることは何かを明らかにすることが目的である。

1-2 既存研究に対する疑問

今日、国内各地では、その地域にしかない魅力を活用した、地域密着型の観光事業が盛んに取り組まれている。同時に、従来までの見て通り過ぎる物見遊山的な観光形態とは異なる形態に視点を当てた研究もまた、盛んに行われてきた。試行錯誤をしながらの新たな観光形態においては、取り組む観光事業が必ずしも成功するという保証はどこにもないし、こうすべきだと言い切れる方法も確立されていない。

この新たな観光形態を、地域のまちづくりと上手く融合させ、地域により良い効果をもたらすためには何が必要なのか、何に重点を置けばよいのか等の視点から分析し、成功へする方法を見出すことを目的とした研究が進められている。それらについて述べられた著書では、まず著者が実際にフィールド調査やヒアリング調査を行った地域における観光事業の事例を示し、そうした上で、より効果的な方策を導き出すという流れが多くみられる。さらにそれらについて、著者の見解も交えて解説した後、最後には調査で明らかになったことや分析結果のまとめとともに、新たな観光形態の、将来に向けての展望が記されていることが多い。

一方で、これらの先行研究にはいくつかの疑問点もあると筆者は考える。まず、取り上げられる事例分析についてである。これらに活用される事例は、どれもホスト側の立場にたったの分析が多く見られる。さらに、ホスト側の地域の中でも、観光事業に積極的に取り組む住民に焦点が当てられやすく、実は事業に参加しない住民がいるにも関わらず、この地域の人達は事業に取り組んでいるのだという印象を持ちやすくなる。このため、地域の実態すべてを含めての分析がなされているのかが判断し難い。

また、この地域では成功したからと言って、他の地域で成功するとは限らないことについても注意しなければならない。このような公式化された方法によって、研究の流れや活用される事例にある程度定まった特徴が見られる先行研究は、成功事例を一般化して、着地型観光のあるべき枠組みを提示している。つまり、一つの著書の中で述べられている方法が他の地域に当てはまるとは限らない。そして、事例の多くは、どれも観光プログラムの中でホスト側の地元住民とゲスト側の参加者が親しく交流を楽しんでいる場面が紹介される。しかし、実際の現場では、みんながみんなそうとは言い切れないのではないかと。

本研究は、以上の疑問を踏まえて、観光事業に実際に参加してきた筆者の経験から、これまでの先行研究では注目されてこなかった観光地の実態の部分に注視し、考察を加える。

1-3 本論文の構成

第2章では、本研究における着地型観光の定義の確認と、着地型観光が登場するまでの国内観光の歴史、そして着地型観光に取り組むことによって、人々にどのような影響を与えうるのかについての解説を行う。第3、4章は事例分析となっている。第3章ではホスト側の分析として、今日も観光事業に取り組む地域住民へのヒアリング調査内容の報告とそれの分析の結果について触れる。続く第4章では、筆者が実際に関わってきた二つの地域での観光事業を事例として紹介する。ここでは、第3章とは真逆のゲスト側に注目して分析を行う。各章の最後には、それぞれの分析結果とこれまでの着地型観光に関する研究の成果を踏まえて、現場の実態との類似もしくは相違点について述べる。そして第5章では、本研究の総括として、これまでに捉えられてこなかった現場の実態について触れながら、

今後の着地型観光研究への展望を考える。

第2章 新たな観光形態としての着地型観光

2-1 本研究での着地型観光の定義

本研究で用いる事例を基に、筆者は着地型観光を以下のように定義づける。

「地域に根差した観光、つまり、地域に人を呼び込むことを目的として、観光地域住民が独自に団体や組織を結成し、地域の文化や特産品・名所を活かした独自の観光プログラム・事業を展開することで成り立つ観光形態」

さらに、そこでは少なからず、もてなす側(プログラムに携わる人や積極的に地域の観光事業に取り組む人を指す)ともてなされる側(観光を目的に観光地域を訪れ、地域独自の観光プログラムに積極的に参加する人を指す)の間で何かしらの触れ合いや関わりがなされるものと捉えている。例えば大社や山村は着地型観光を以下のように述べている。

「旅人を受け入れる地域(着地)の人材や組織が主導的な役割を担って旅の商品開発や運営を行うスタイルは今、旅行業界で「着地型観光」とよばれている。」(大社、2008:p.18-19)

「2005年前後から、地域自らがプロデュースする集客ビジネスのあり方として、観光業者や観光研究者の間で「着地型観光」という用語が広く使われ始めた。」(山村、2011:p.148)

「着地の地域社会(主として目的地側の観光業者)が地元の資源を旅行商品として販売するために「集客」システムを構築していくモデルを「着地型観光」と呼んでいる。」(山村、2011:p.148)

上記のように、着地型観光は一般的に旅行業界で使われる用語で、従来の発地型観光と対比するビジネス用語として捉えられている。すなわち、観光客を迎える側の地域が主体となって製作・運営する集客ビジネスモデルとしての見方がなされていると言える。

また、一方で、以下の視点から着地型観光を捉えようとする先行研究も見られた。

中島は、現在、増加傾向にあるグリーン・ツーリズムやエコ・ツーリズム等について触れた上で以下のように述べている。

「これら地域に密着した観光は、しばしばオルタナティブ・ツーリズム(もうひとつの観光)と呼ばれるように、従来からのマス・ツーリズムとは異なることに注目しなくてはならない。その発信地はごく普通の地域であり、必ずしも有名な観光地ではない。また、担い手は地域に住まう普通の人びとであり、観光産業や行政に関わる人ばかりではない。要は、地域の暮らしに共感し学びあう知的交流を展開することで、個性的なまちづくり、暮らしづくりを進めているということである。」(中島、2011:p.15)

併せて、先に紹介した山村もまた、上記の内容と共に次のような解説も行っている。

「地場産業の衰退や高齢化・人口減に悩む地方都市や農山漁村において、地域振興の観点から地域自らの手による旅行商品開発のニーズが高まり、「着地型観光」という用語はまちづくりの分野でも一般化しつつある。」(山村、2011:p.148)

このように、観光地域となり得る地域の人々が立ち上がり、自身の地域に根差した観光事業に取り組む、地域主役の新たな観光形態として、着地型観光を捉えようとする動きも見受けられる。つまり、地域に住む人によって結成された団体が、地域独自の文化や歴史等を活かすことによって人を地域に呼び込み、地域の賑わいを取り戻す。このような、地域のまちづくりと観光を結び付けた新たな観光形態としての捉え方もまた、なされているのである。

本研究での定義は、先のビジネス用語としての捉え方よりは、後の地域の人々による地域のまちづくりと観光を関連付けた新たな観光形態、つまり、地域の活性化につながる事業としての役割を担うものとしての捉え方に近い。

2-2 着地型観光のあけぼの

着地型観光について、前節では定義や概念について述べたが、ここでは着地型観光が登場するまでの歴史的経緯や背景を振り返ってみたい。

国内では、古くは万葉集の時代から、現代の観光のような行動を確認することが出来るのだが、当初その行動は高貴な人々の間でのみ広まっていたとされている。時代を経るにしたがって、伊勢神宮の一般庶民への参詣許可や熊野詣の誕生を初めとする、寺社仏閣への参拝を目的とした参詣旅行の浸透や国内の制度（参勤交代制度や道路・宿駅整備等）の発達によって、その行動は大衆の間で徐々に広まっていった。

ただし、「観光」という言葉や概念が国内で使われ始めるのは、江戸の終わりから明治にかけてであり、まだまだ先の事であった。

さらに、国内で観光が大きく発展を遂げたのは、第2次大戦後の事である。当時そのほとんどを占めていたのは、一度に大勢の人数で観光地を訪れる、マス・ツーリズムだった。団体観光客がガイドの後を付いて、説明を聞いてしばらく経つと、また次の観光名所に移動する。しかも、その際の観光名所での滞在時間は比較的短い。このような物見遊山的な流れが主流だった。マス・ツーリズムが拡大した背景には、国内道路網の整備・発展と東海道新幹線開通等の移動のための手段の高度化及び、その時間の大幅短縮化に加えて、大阪万国博覧会や東京オリンピックの、世界的なイベントの催行が盛大に執り行われたことが要因として挙げられる。これらの世界的行事は、国内外問わず大勢の人々を開催地に惹きつけた。高度経済成長期には、各地でレジャー・リゾート施設の建設が相次いで行われ、施設の建つ地域に大勢の人々が押し寄せた。そしてこの動きは国内各地に浸透していった。

しかし、時代を経るに従って、当時の観光形態は深刻な問題を生み出していった。一度に多くの観光客を受け入れてきた観光地は、地元の人々の生活環境への影響（例えば自動車の騒音や暮らしの場への侵入といった観光客のマナー違反、自然環境の本来の姿の消失等）、つまり観光公害が徐々に見られるようになったのである。

1980年代に入ると、上記のマス・ツーリズムによって引き起こされた課題が次々と表面化する一方で、各地域の自然や文化を保護しながら観光に活かし、その利益を地域内にもたらし、持続可能な観光が模索されるようになった。

さらにそこから時代は進み、近年では人々の趣味・関心や行動に変化が生じ、より新しい形態の観光が各地で広がりを見せている。人々の趣味・関心は多様なものとなり、次第に個別化していった。その背景として、以下の二点が考えられる。

一つは、情報の入手手段の容易化による、人々の興味関心の個別化だ。携帯電話やインターネット等、数々のメディアが普及し、読んでみたいまたは知りたいと思う記事を容易に閲覧することが可能になった。同時に、従来までの誰もが知っているような有名観光地に出掛け、名所を見て通り過ぎるだけの物見遊山型の旅行形態に飽きが生じていた人々の心には、より新鮮で、自身の興味に近い、その地域だけでしか味わえない感動を得られる旅を求める動きが顕著となった。須田は、情報入手手段の容易化・高度化と人々の観光に求めるモノの変化との関連を次のように述べている。

「IT機器や情報システムの急速な普及発達により、人々は居ながらにして自ら多くの観光情報を自由に検索できるようになった。このため、旅行（観光）情報は各人がアクセスして得る情報が中心となり、そこから選ばれる観光目的地や観光手法もそれぞれの得た情報によって各人の好みに応じた観光を選ぶようになり、また、観光の企画も自らの得た情報をもとに自らつくることが多くなってきた。」(須田、2017:p.103)

つまり、人々は個人の手で情報を入手する術を持ち、各自興味関心のある観光地や旅行行程を選択し構成する機会を得たのである。宿泊施設、交通機関も各自が好きな時間・期間を決め、希望のグレードやコースを選択する機会がインターネットにより創出された。インターネットの普及により、自身の求める情報を手軽に得られるようになったことで、それぞれが自身の希望する旅を自らの手で生み出すことが可能となった。裏返すと、旅行会社のツアー企画を依頼し、集団となって同じ目的の下、観光地を大勢で巡るマス・ツーリズム型の旅行形態への需要が徐々に低下していったことを意味している。

そして、高度経済成長期のモータリゼーションも、新たな観光形態への移行を後押しした背景の一つと捉えられる。自動車の登場により、人々は自身の行ってみたいところに自由に足を運ぶことが可能になった。それに自動車の中は、公共交通機関と異なり、自身だけの空間であるから、他者に余分な気を遣うことなく目的地まで行くことが出来る。さらに、また行きたいと思えば、他の交通機関を経由せずに直接目的地に乗り入れることも可能となった。

観光客を受け入れる側にも新たな動きが生じている。これも背景の一つとして捉えることが出来る。かつて各地で展開されたレジャー施設による地域への観光客の呼び込みは、外部に依存した観光開発であり、その利益の多くは地元ではなく外部資本にもたらされた。また、各地で少子高齢化や過疎・過密等の社会現象が進行している。特に過疎によって住民の減少が著しい地方では、歯止めを掛けようとする地域にしかないモノを改めて見直し、それを活かしたまちづくりを行う。そして外から人を呼び込むことで少しでもファンを生み出せるよう、またお金を落としてもらえよう、観光と結びつけた施策に取り組む自治

体が増加傾向にある。

かつて、国内観光の主流であったマス・ツーリズムがもたらす影響は、各地に深刻な課題をもたらした。また、自動車や情報機器の普及によって、人々が観光に求めるモノやコト、現地への移動手段と現地での過ごし方に変化が生じた。やがて人々は、新たな時代の流れに応えようと、観光とまちづくりをむすびつけるなどして新たな行動に取り組み始めた。これらの背景があって、新たな観光形態が生み出されたと言える。そしてこの新たな観光形態の一つが、本稿でテーマとしている着地型観光であり、それは前節で見てきたように、多くの研究者たちによって注目されるに至ったのである。

2-3 着地型観光が生み出す、人々への影響

一つの地域で、着地型観光事業が取り込まれる時、それは様々な人に何らかの影響を与えていて、例えば、地元の魅力を発掘し、それを地域外に広めて観光客を呼び込もうとするホスト側、そして観光地に向いて観光プログラムに参加するゲスト側の人々が挙げられる。また、その影響は人によってはプラスに、別の人にはマイナスに働くものと考えられる。

まず、ある地域で着地型観光を取り組もうとした時、いろいろな立場の人々が生まれる。大きく分けて次の三つの立場が考えられるだろう。

一つは、先行研究でも取り上げられやすい立場の人々である。それは、地域の観光事業に興味関心を持ち、独自の組織を結成して活動する、もしくはボランティアスタッフとしてプログラムに参加する人が例として挙げられる。以上のような立場の人々は、地域に人を呼び込もうと工夫を凝らしたPR方法を考案し、より地域の事を知ってもらうためには何が必要かを考えることに自ら参入する人々であると言える。大社(2008,2013)や中尾(2012)を初めとする、着地型観光または観光まちづくりに関する研究についての著書では、上記のような立場の人々の視点に立って調査や分析が進められている。

二つは、上記の人々とは異なる立場の人々である。それは、その地域で日々生活を営んでいるけれども、地域の観光事業や取り組みに特に関心を抱かない立場の人々である。この立場には、地域外への通勤や通学のために、地元地域で過ごす時間が比較的短く、地域のことをあまり知らない、もしくは知る機会が得られない人々や、そこで一日を過ごしていても、観光事業自体に興味を持たない人達が含まれていると考えられる。

三つは、その地域に立地し、営業している地元企業の立場である。例えば、地元地域内を走るバスやタクシーといった交通機関や、その地域の企業の関連施設が考えられる。この場合、企業の運営や業務を果たすことが主な目的であり、地域の観光事業が第一の業務だという意識を持って参入しているとは言い難い。ここで、交通機関は、大きく二つに分かれる。一つは、観光列車や遊覧船といった、交通機関が人々の観光の目的の対象ともなり得る場合である。二つは、観光プログラムの開催地に向かう参加者を一部の利用客として迎える、業務の一環として観光事業に関わる場合である。このように、交通機関については、その地域によって立場に異なりが生じることに注意する必要がある。

そして、それぞれの立場によって、着地型観光が与える影響は違ってくる。

着地型観光は、一つ目の立場の人々にとっては、同じ目標に向かって取り組む人や観光客の人々との交流や、新たなやりがいを生み出す機会を創出する場として働いている。ま

た、事業を展開する上で、コーディネーターやボランティアスタッフとしての講習を受ける中で、その人が新たな役目を担う機会を与えられ、地域や観光に関する知識を身に付ける場を設けるといった、地域での過ごし方や地域への姿勢に対する変化が生み出されると言える。

一方で、二つ目三つ目の立場の人々には、以下のような影響が考えられる。一つは、着地型観光事業がその地域で行われることによって、その地域に観光客が入り込み、そこで消費活動が行われることで地域は外から収入を得て、地域内の経済に潤いをもたらすということである。そして、観光プログラムが有料化されてもなお人々が来たいと思える観光プログラムが創出されれば、これはより強いものとなる。

だが、特に二つ目の立場の人々にとっては、時に着地型観光は悪い状況を生むことも考えられる。観光客の中に、マナーを守らない人がいた時、地域内にごみが持ち込まれたり、静かだった空間が突然人々の話し声で騒がしくなったりするなど、それらは、日々の生活圏に負の影響をもたらすことになりかねない。特に着地型観光の場合は、地域内のあらゆる所が観光の舞台としてなり得る可能性があり、住民の生活圏に観光客達が足を踏み入れやすい観光形態であるため、住民は上記のような影響を受けやすくなると考えられる。

また、地元住民一丸となって観光客を迎えようとして、地域住民は観光事業に取り組むべきだという考えが生まれてしまうと、この立場の人々にとっては、もともとその事業はほど遠い存在であると同時に、それに参加しなければならない状態を生み出しかねない。これは、着地型観光事業がこの立場の人々にとって、重要性の低いものとして捉えられてしまう可能性を高めると共に、事業に賛成する人々が逆に減少してしまう状況さえ生み出すことも想像出来る。

このように、観光客をもてなす側の地域住民に様々な影響を与えることが考えられる着地型観光だが、もてなされる側の参加者達にも何らかの形で様々な影響をもたらしている。

まず、人々は、ある地域で着地型観光事業が開催されるという情報をインターネットやSNSを初めとする手段で入手する。情報は、参加したいという欲求を人々の中に生み出す。その地域に呼び込むことで、参加者達に地域に自ら足を運んでもらう機会を与える。同時に、プログラムを通して地域の伝統的な文化や技術、特産品といった地域に関する知識や特徴を学習する場も創出する。また、この事業に参加しなければ出会うことのなかった人々との触れ合いも実現させる。

一方で、プログラムが他の地域でも味わえるような、独自性の低いものであり、とにかくホスト側のPRや行程が徹底されているような体験やガイドは、参加者自身の欲求が叶えられにくく、参加したこと自体が負の要素となりかねない。

着地型観光は、それがあある地域で展開することで、その地域自身やそれに何らかの形で関わりを持つあらゆる人々に、多様な影響をもたらす。そしてそれは、いつもとは異なる空間で、めったに体験することのない思い出作りや、ここでしか会えない人との交流といった、その地域だけの経験の機会を創出する。一方で、参加者にプログラムを楽しんでもらい、地域のことをより多く知ってもらうことに、ホスト側があまりに必死になりすぎると、ある参加者にとってはそれが苦痛となって、地域のより良いところを知ってもらう機会のはずが、その地域にマイナスのイメージを抱かせる機会を生み出してしまふといったことも考えられる。そこに関わる人々の姿勢や思惑、そして捉え方によって、着地型観光が与

える影響は、ホスト・ゲスト二つの立場の一人一人によって、良い影響も悪い影響も与えかねない。

先行研究は、着地型観光の影響について、どちらかといえば人々にとってプラスの影響があることを前提に述べられることが多く見られ、この形が公式化しつつある。しかし、上記で述べてきたように、着地型観光の人同士の関わりにはもっと多様な側面が存在しており、そのような部分に視野を広げる必要があると考えられる。

第3章 着地型観光を展開するホストの姿勢

ここでは、ホスト側がゲストとの関係構築を目指す上で重視していることについて、実際に観光事業に携わる住民へのヒアリング調査から抽出する。同時に、先行研究を踏まえて、実態との類似・相違点を分析する。

3-1 奈良県桜井市—桜井市観光まちづくり協議会の事例—

(1) 桜井市観光まちづくり協議会の概要

奈良県桜井市は、奈良盆地の中央南東部に位置し、宇陀市・橿原市・天理市・奈良市・田原本町・吉野町そして明日香村と隣接している。大和の国であり、日本のはじまりの地として名高い町で、市内の至る所に古代の遺跡や古墳、寺社仏閣が点在している。また、市内には山之辺の道が通っており、国道から横道に入ると、そこは曲がりくねったカーブが目立つ、独特な形態をした道路が続いている。そして、その道路沿いにはまだまだ貴重な遺跡が遺されていると考えられている。そびえ立つ大きな鳥居が象徴的な国内最古の神社「大神神社」や、数多くのボタンが敷地一帯で花を咲かせる「長谷寺」、纏向遺跡や苧環塚等、古代の書物に登場する遺跡の数々というふうに、観光名所も様々である。

本研究で取り上げる桜井市観光まちづくり協議会の取り組みの一つが、市内の観光マップの作成である。市内全域に散らばる名所の位置やアクセス方法を、マップを利用することで分かりやすく伝えている。過去には、市の名産品三輪素麵を用いた「賑いそうめんマップ」の作成が行われている。また、マップに加えて市内の名所付近の案内表示板設置にも取り組んでいる。名所に続く道の始点から終点までの道中、中でも特に迷ってしまいがちな分かれ道、すなわち複雑なポイントを注視した設置がなされている。他に、地域住民にも市内に存在する貴重な遺跡のことをもっと知ってもらおうと、様々なセミナーの主催も担当している。今年も、新たに発掘された遺跡に視点を当てた、「纏向からの発信 この国の成り立ちを考える」が全3回にわたって開催されている。

以下、当協議会会長である京本勝弘氏へのヒアリング調査内容から、本研究課題への分析と考察を行う。

(2) 着地型観光を展開するホストの姿勢

— 当協議会会長へのヒアリング調査結果報告をもとに —

本章の記録は、2017年10月1日に行った、桜井市観光まちづくり協議会会長の京本勝弘氏へのヒアリング調査の録音記録を基にまとめ直したものである。

本研究における京本氏の立場を確認しておく、市の着地型観光事業に対し、意欲的姿勢で取り組む地元住民と言える。

京本氏は、自身が実際に経験した事例を基に、ゲストを地元桜井市に迎えるにあたっての目標と心掛けるべきこと、すなわち、桜井市の魅力を地域外の人々に発信し、市を訪れるゲストを増やすとともに、ゲストとの関係を一過性にしないために、ホスト側である地域はどう接すればよいかについて語った。

京本氏は、「1人、つまり観光事業に関わる関係者だけで(観光事業)をやっている、発信力はない。地域社会の人も含めて(地域の魅力)を発信できる、そういう知識を持つ必要がある」と話す。これにつながる事例が、以下のものだった。

市内の仏教伝来として伝わる場所での出来事だった。早朝、別件でそこにいた京本氏の前に1台のタクシーが止まった。桜井市内を拠点に走る、ローカルタクシーだった。タクシーが止まったかと思うと、中から老夫婦が降りてきて、今いる場所の地名が「金屋」なのかどうかを尋ねた。京本氏はその問いに答えると同時に、老夫婦にどこから来たのか聞き返した。すると、老夫婦が言うには、横浜から来て、近鉄桜井駅に到着し、自らタクシー運転手に道を案内してここまで到達したとの回答を得た。京本氏は、ホスト側である地元民が地域外からのゲストに逆に案内されてここまで乗せてきたタクシー運転手に驚き、注意を促した。

ここでの状況を整理すると、発信力という前に、もてなす側である地元民がゲストに案内されているという状況だったという話であることが伺える。

京本氏はさらに、「今、観光というのは、そういったケース(上記事例)で、地元の人が訪問客に尋ねられた際には、それに対してもっとすぐ答えられることの出来る形が求められる」と話す。実際、訪問客の中には、観光地域に来るからには、ある程度その地域に関する知識を身に付けて訪れている人が見られることに、感心させられるとのことだった。ゲストとのつながりというのは、地域を尋ねてこられた訪問客に尋ねられれば(地元住民の誰もが)すぐ答えることの出来る状態を創出することから始まると語った上で、そうするために、地元の人に向けた講演会を行うなどして、地元の人にも分かってもらうことで、桜井市のことを広めていくことが最も大切であると述べてくれた。これが最後には人(ゲスト)との一過性でない深いつながりを生むことに結びつくのであり、パンフレットでは伝えることの出来ない、リアルな案内を地元で取り組んでいかなければならないと京本氏は言う。

京本氏は、誘客を図ろうとするならば、市が持つ財産がどのようなモノか、日本の人間の、日本中のルーツがここにあることを、ここにはじまりがあるということ、地元に住む人々に再度認識してもらう必要があると話す。地元の人々が地域外に出た際、もしかしたらその地の人に住んでいる場所を聞かれるかもしれない。そんな時、住んでいる場所(ここでは桜井市)はこういう地域なのだと話し合えれば、住んでいる場所がどんなところなのかが拡散され、それが発信につながると指摘する。

京本氏は、もう一つ、事例を挙げてくれた。タレントの鶴瓶が出演する某番組が桜井市を訪れた際、相撲神社という山間部にある神社の場所を、道中偶然出会った地元の人に尋ねた。しかし、地元の人々は相撲神社の場所を伝えることが出来ず、最終的に鶴瓶一行は相撲神社には到着しなかった。代わりに、相撲神社が位置する山域とは別の山域に入ってしまう、相撲神社の外部への発信の機会を失ってしまったというケースであった。

行きたい、見てみたい、その気持ちで地域のことを発信する姿勢、そして持続ある発信の方法や仕掛けを考えなくては、ゲストとの関係が一過性で終わってしまうことになってはならないとも答えてくれた。

京本氏のヒアリング結果からは、桜井市での着地型観光事業に取り組む中での今求められていることは発信力だということが伺えた。それも、ただそれに携わる人々だけでなく、そこに住んでいる地元の人々や地元企業に勤める人も含めて、地域の人みんなが訪問客を迎えようとする姿勢が大切だということが見て取れる。またそれと合わせて、地域外への発信が重要であり、その発信によって桜井市と他地域に住む人とのつながりが創出されていくとも述べられていた。そのためには、事業に携わる人々以外の人々もまた、改めて自身の住む桜井市の魅力や市が古代から育んできた文化、歴史そして貴重な名所のことを知る必要があるという、京本氏の意見を読み取ることができる。

ここで再度確認すると、今回ヒアリング調査に協力して頂いた京本氏は、桜井市の着地型観光事業に意欲的に取り組む立場に位置する地元住民と捉えることが出来る。この立場の人が抱く、今の事業に対する目標や求めていること、つまり理想がどのようなものか、何を想って取り組んでいるのかについての答えを得るに至った。

そして、このヒアリング調査結果は、筆者にもう一つ、重要なことを教えてくれている。事例でも挙げられていたローカルタクシーの運転手や鶴瓶氏に偶然尋ねられた地域の人々のような、仕事上その地域の観光に何らかの形で関わりを持つ可能性のある人、桜井市の着地型観光事業に携わることも興味関心を特段持つこともなく、ただ市内に暮らしている地元住民の人々の存在である。

次項では、京本氏から得たヒアリング内容と先行研究を比較し、ホストとゲストの関係構築について、先行研究が把握できている部分とそうでない部分の分析と考察を行う。そこから、先行研究と観光地の実態の狭間に存在する相違点を明らかにしたい。

3-2 先行研究とヒアリング結果との比較

前節では、現在、地域の着地型観光事業に取り組んでいる地域住民へのヒアリング調査結果から、観光事業に対する姿勢について、現場の実態の把握を試みた。続く本節では、ヒアリング調査結果を基に、ホスト側の人々の姿勢の実態に関する分析を行うと同時に、先行研究と現場の実態を比較し、これまでの先行研究が捉えきれない観光地の実態の側面に注目して考察する。

京本氏のヒアリング内容からは、「情報の発信力」がホスト・ゲスト間の関係構築に重要な存在であると共に、それを高めるためには、地域に住む人々が地域に関する知識を学ぼうとする姿勢が求められるという視点を捉えることが出来た。そして、ホスト・ゲスト間の交流について、先行研究でもそれと類似する見方が確認できた。

須田は、「各地域の人々が、自らの身のまわりを観光客(よその)の目線に立って見つめ直し、観光対象となる可能性のある場所(モノ・コト)を再発見することから、観光は始まると思う。」(須田、2017:p.174)と記している。この文章からは、地域の人々がもう一度自身の住む地域に目を向けて、地域の姿を今一度見つめ直してみることが、その地域での観光誕生のきっかけとなり得るという考えが見て取れる。須田の見解は、地元の人々が桜井市を訪れる人々がどのような想いでそこにやって来ているのかを意識しながら、今一度地

元桜井市に目を向けて、自身の住む町についての知識を持つことが望まれるという京本氏の話と重なる。

また大社は、NPOハットウ・オンパクの事例を基に、別府市の取り組みについて記す中で、別府市の事業関係者へのヒアリング結果のうち、以下のことを紹介している。

「日常的にも情報発信をしていくことで別府全体が活気づいているように見えてくる。特に情報発信力がある人や事業者には、力を入れて情報発信をしてもらうことが大切。この点が集客交流や着地型観光の成功のカギとなるのです。」(大社、2013:p.107)

「(省略)自分のまちや隣まちの人に地元の評価を知ってもらい、情報発信してもらうことで地元の評価をもう一度高めていくこと(再生)が不可欠だった。」(大社、2013:p.107)

イベント開催にあたり、別府では情報発信に力を入れた取り組みが行われ、それによって外部からの集客につながったことが紹介されていた本書で、やはりまずは地元住民達も実際に事業を体験し、体験を経た地元住民達による情報発信がポイントであると指摘されている。つまり、ここでも京本氏のヒアリング内容との間に関連性が見られた。

地元住民達に地域のことを知ってもらう何かを創出することに取り組み、そこから地元住民達が何らかの形で情報発信していくことで、その地域への集客につながるという主張が、京本氏へのヒアリングと大社の考察から改めて確認できた。ゲストとの関係構築を目指すという姿勢の下、情報発信と地域住民の地域への理解を深める場の創出の現状について、先行研究と観光地の実態に類似する点を確認できる。つまり、先行研究は上記の側面について把握できていると見られる。

一方で、ホスト側の地域において、先行研究では捉えられていない立場の人々の存在を確認するに至った。京本氏のヒアリングの中でも登場した、タクシーの運転手や相撲神社周辺に住む地域住民の人々のような、地域の観光事業や、そこにゲスト達が来ることに對し、特に関心を抱かない人々の存在である。ホスト側の地域では、いろいろな立場の人が日々の暮らしを送っていて、その誰しものが、観光事業や観光客が町に来ることに興味関心を抱き、何かに取り組もうとする姿勢を示すとは考えにくい。

上記のような立場の人々も含めて、着地型観光の今後について研究されている例が、現時点ではあまり見られない。つまり、これまでの研究が見落としている側面と見られる。

第4章 着地型観光におけるゲストの行動の実態

今度はゲスト側の視点から、ゲストの着地型観光への姿勢やそれにおける行動の実態について、事例から理解を深めると共に、先行研究と観光地の実態の比較を行う。

4-1 奈良県明日香村あすか歴史探検隊の事例

(1) あすか歴史探検隊概要

あすか歴史探検隊は、石舞台古墳をはじめとする飛鳥時代の遺跡や寺社仏閣の点在する

奈良県明日香村を舞台に、奈良県立大学生のガイドによる、主に県外からの修学旅行生たちを対象とした体験型ツアーである。明日香村商工会公式ホームページの教育旅行の中でも、「大学の学生に構成・演出をお任せ」「ツアー中、何が起こるかスタッフにも分からない」と紹介されているように、ただガイドの話だけを聞いて見て帰るといった一般のツアーとは異なる。生徒達は複数の班に分かれて探検隊を結成し、大学生と共に2～3か所の名所を巡る。道中はスタッフによる明日香村の歴史や文化等、村に関する知識を中心とした解説やガイド説明はない。それぞれが自由な時間を過ごしながらい目的地を目指す仕掛けになっている。

本プログラムは2012年、村の商工会と観光協会からなる地元組織「飛鳥ニューツーリズム協議会」と奈良県立大学の麻生憲一教授（現立教大学教授）のゼミ生による民家ステイと体験プログラムの一環として開始された。

麻生教授は、あすか歴史探検隊について以下のように解説している。

「体験プログラムの『あすか歴史探検隊』では、大学生が隊長となって中高生をナビゲートします。こうしたプログラムでは、よくシニア層の歴史愛好家がガイドを務めますが、中高生が歴史に興味をもつきっかけは、そんなに詳しい歴史解説ではありません。知識の前に体験です。そこで中高生に『歴史探検隊』になってもらい、自分たちの目で不思議な場所を発見してもらいます。各スポットで大学生がフリップを掲げながら、中高生たちと一緒に謎を解き明かしていくのです。」(麻生)

地域の歴史関連スポットについての解説をガイドが語るだけでなく生徒たちも参加して解決する、あすか歴史探検隊は体験と交流に重きを置いた、体験交流型ツーリズムに向けての一試みと捉えることができる。

筆者はあすか歴史探検隊に二度参加した。本研究では、二度目の参加となる2016年1月20日、福岡県の中学生たちを迎えて開催されたあすか歴史探検隊での、中学生たちとの交流経験を基に分析を行う。

（2）着地型観光におけるゲストの行動の実態 1

— あすか歴史探検隊を経て —

2016年1月20日、福岡県内の中学生達を迎えて、あすか歴史探検隊が開催された。筆者は、名所でのガイドの役割を担う副隊長を務めた。以下は、あすか歴史探検隊に筆者が取り組む中で得た、中学生達との交流と経験を基にまとめたものである。

ここで確認しておきたいのは、筆者の立場であるが、参加者である中学生をもてなす側の立場と言える。さらに細かく見てみると、筆者は当時、このプログラムに自ら参加したいという意志をもって活動に取り組んだ。そして、明日香村は決して自身の出身地ではないが、他のプログラムでも何度も訪れた地であったことから、愛着ある地域の観光事業に参加して、この地域の良いところを広めたいという想いを胸に事業に参加した。よって、地元住民とまでは言えないが、意欲的に明日香村の事業に取り組む立場の一員として位置付けられるのではないかと思う。よって、本研究課題を解くための事例として活かせるかと判断した。

初めに、ゲスト側の中学生達との交流が深まった瞬間は、プログラム第1の目的地である万葉文化館で起こった。筆者が所属していたグループを率いていた当時4回生の先輩は、自由散策の号令を掛けてしばらくすると、館内を巡る生徒達に軽く声を掛けては、それを機に生徒達の輪に入って、歴史や展示物とはあまり関連の持たないような、他愛のない会話を交わしていた。設置されている歴史クイズに熱中する生徒達を応援し、さりげなく館内の感想等を聞いては、そこから更に会話を発展させていた。生徒達も別段恥ずかしがる様子もなく、先輩との間で自然と交流が創出されていたようだった。そんな先輩と生徒達の様子を見て、筆者も生徒達に声を掛けてみることにした。クイズに挑んでいる生徒達と共にハラハラしながら解き進めたり、古代に使われていたとされる農具や家屋等の体験コーナーで恥ずかしそうに体験する生徒を他の生徒達と一緒に見守ったりするなどして、知らず知らずのうちに交流が深まっていった。ついさきほどまで、プログラムを無事終えることだけしか見えていなかったはずの筆者は、自身でも気づかぬうちに生徒達との交流を深め、楽しんでいたといっても過言ではない。

次に、参加者と筆者の交流が深まった瞬間は、村内の名所に向けて移動する道中だった。先輩が探検隊を先導し、筆者は最後尾で隊列が乱れないよう管理する役割を務めていた。先頭を見ると、先輩は前を歩く数人の生徒達と会話を弾ませていた。生徒達も半ば照れながらもではあるが、先輩との何気ない会話をしばらく続けている様子だった。筆者もその姿を見ているうちに、自身の近くを歩く生徒達と会話を始めた。修学旅行のことを尋ねてみると、出発した時の事やこの先の行程の事等、生徒達は自らいろいろなことを話してくれた。朝早くに出発して寒かったことや、お昼に食べたお弁当に入っていた食材やメニューの事も詳しく話してくれた。他にも、個人が今注目している漫画やアニメはどんな作品で、その中のどの場面がお気に入りなのかといった、それぞれの趣味についての会話が盛り上がりを見せた。これらはどれもあすか歴史探検隊や明日香村、名所の事でもないし、生徒達からこんな答えが返って来るだろうと予測することの出来ない、ごく自然なやり取りだった。だが、このごく自然なやり取りが、生徒達もてなす側に対して、自ら会話という行動を起こさせ、二者の間で交流が創出されるに至った。

さらに、筆者はふと、ガイド練習時に講師の先生に教わったことを思い出し、実践を試みた。それは、生徒達に地元福岡のことを尋ねてみようというアドバイスだった。いざ実践してみると、福岡弁と関西弁との違いや地元の名物や名所、そして中学校が所在する町のこと等、生徒達は福岡のことについて、様々な視点から話してくれた。ここで注目すべきは、今回の旅行の目的地である明日香村にしながら、地元であり出発地の福岡に関する話で、交流が深まったことである。

当然のことかもしれないが、ここで敢えて記すと、明日香村にいるからといって明日香村に関する話をしなければならないという決まりはどこにもないのである。そしてそれは、明日香村の名所や歴史等、観光地域に関わる会話とは全く異なる、普段と変わらない何気ない会話によるやり取りでさえも、二者の交流が深まる可能性を秘めていることを示していると言える。

全てのプログラムを終えて、観光バスに乗り込み、明日香村を後にする生徒達一行をスタッフ全員で見送った時のことである。生徒達の中には、窓を開けて乗り出しそうな勢いで手を振ってくれる生徒や、バスが万葉文化館を出る最後の最後まで手を振ってくれた生

徒の姿もあった。万葉文化館に戻る時、誰かが感動したとつぶやいたのを覚えている。

この事例からは、もてなす側のあすか歴史探検隊スタッフと、もてなされる側の修学旅行生達の間で創出される交流のきっかけが、必ずしも観光地である明日香村の歴史や文化、名所に関わるものでないことが見て取れた。普段と変わらない、何気ない会話をしている時にこそ、スタッフと参加者の間の会話がより弾んだ。このことは、参加者達は、スタッフとの交流に、観光地域に関する事だけを求めていることを示している。参加者達が地域の観光プログラムに参加する中で期待しているものや理想としているものは、何もその地域に関わることやプログラムについての話題だけではない。時に普段とさほど変わらない、何気ない会話や気軽な触れ合いをも参加者達は求めていることを、この事例は教えてくれている。何気ない会話がなされている時、それは双方が相手に聞いてほしいことを、気兼ねなく自然と相手に伝えている、いわば自然で、緊張や不安等を抱えず観光プログラムと向き合っている状態である。

つまり、この事例からは、地域の観光事業に参加する際、参加者達は観光名所を見よう・知ろうとする姿勢だけでなく、規定やルールに縛られない、自然体で気軽にプログラムに参加して、自分なりに楽しもうとする姿勢を抱いていると理解することが出来る。

しかし、ここで、筆者はあることについて再度考え直してみた。それは、参加者についてである。上記で記した参加者とは、あくまで観光プログラムの内容やもてなす側のスタッフに対し、自ら働きかけようとする、意欲的姿勢を持って観光事業に参加することを前提として述べているに過ぎない。事例を用いて説明すると、例えば、道中では縦列で移動を行っていたが、最前列と最後尾に立つスタッフと近いところにいた生徒達は、その立ち位置からも筆者達スタッフとの会話に参加していた。だがその一方で、自分たちだけで会話しながら歩く生徒や、特に同級生と話すこともなく自身のペースで歩く生徒達が全くいなかったと言えば嘘になってしまう。また、最後のバスの場面でも、みんながみんな手を振ってくれたわけではない。

このように、上記の事例分析では、これまでの着地型観光に関する先行研究の多くと同じく、まだまだ一部の立場の参加者にのみ視点を当てている状態であり、それ以外の立場とはどのような立場で、その立場に立つ参加者達はどのような姿勢で参加していたのか等、現場の実態を踏まえて述べられていない。

この、実態を踏まえての分析については、次の事例と併せて、後で詳しく述べていく。

以下は、筆者も参加者側に立って携わったプログラムでの経験をまとめたものである。

4-2 京都府宇治田原町 Ujitawara tea Plantation の事例

(1) Ujitawara tea Plantation の概要

次に、京都府宇治田原町での経験を用いた事例を分析する。

宇治田原町は、京都府の東南部に位置し、一部は滋賀県との県境に接する。山肌の至る所に茶畑が点在し、お茶の郷の風景を目にすることが出来る。名所は、日本遺産認定永谷宗円の生家や禪定寺等の社寺が挙げられる。町内の飲食店舗による宇治田原をたべつくすや、地元団体によるブース出店、お茶の文化体験、町内周遊観光バスツアーが行われる宇治田原ふるさとまつり等、様々な地域イベントが展開されている。他にも、今回用いる事例のような町民による観光関連組織による多様な取り組みがある。

お茶のまちと聞いて真っ先に浮かぶのは、平等院鳳凰堂が建立された宇治市だろう。だが、今は誰もが口に出来る緑茶を全国の庶民に広めた人物は、この町で暮らしながら茶葉の研究・開発に励んでいたと伝えられている。1700年代の日本では緑茶は重宝され、高貴な身分の者だけが飲むことを許された。その緑茶を中国からの輸入に頼ることなく、国内で栽培し茶にする製法を研究したのが永谷宗円であり、宗円の成果によって国内全域にお茶が広まったと伝えられる。

お茶の歴史が深い自然豊かな町で、筆者達は「お茶に恋するGail」の意味を込めた「茶恋G隊」を結成し、多数の観光プログラムに参加した。本研究では、自身も参加者の一員として参加したUjitawara tea Plantationでの参加者との交流を基に分析を行う。

Ujitawara tea Plantationは、海外向けの観光事業を展開する町民の組織であるソーシャルイノベーション宇治田原が主催した、在日外国人に向けた1日お茶文化体験ツアーである。スタッフと参加者が共にお茶作りの一連を体験する。

以下、2016年5月29日開催の当イベントでの経験から、本研究課題の考察を行う。

(2) 着地型観光におけるゲストの行動の実態2

—Ujitawara tea Plantationでの体験交流を経て—

2016年5月29日、筆者は茶恋G隊の一員として、この日試験的に開催された、在日外国人が対象のお茶の文化体験ツアーに参加した。下記の内容は、筆者がこの観光プログラムに参加する中で経験した参加者達との会話や交流を基にまとめたものとなっている。

そして、この事例での筆者の立場を確認したい。筆者は、先にも述べているように、この観光プログラムには茶恋G隊として、当初は町民のスタッフ達をサポートする、もてなす側として参加することになっていた。もともと茶恋G隊メンバーは全員宇治田原町外出身の者であり、訪問者である。しかし、2回生から何度か宇治田原町の観光事業に携わる中で、もてなす側としての活動に慣れ親しんでいった筆者にとっては、この時すでに町に来ることが新鮮ではなくなっていた。よって、ここでは外からの訪問者ではあるが観光目的とは言い難いため、観光客とは異なることを断っておきたい。一方で、当日、筆者達はゲスト達と一緒に、お茶の文化体験を体験しながら、ゲスト達をサポートする役割も務めていた。このためか、筆者自身も町民の案内や指示のもとに、茶恋G隊の仲間達や参加者の人達と一緒に、お茶の文化体験ツアーを一日堪能した。つまり、この事例での筆者は、もてなす側の立場だけでなく、もてなされる側の立場にも位置付けられると言える。

ゲスト達との交流は、最初のプログラムお茶摘み体験から始まった。説明を受けた後、茶恋G隊メンバーも参加者と共に広々としたお茶畑に入って、お茶摘みを始めた。しばらくして筆者達は、側にいたフランス出身のゲストと挨拶を交わすと、会話が始まった。その内容は、それぞれの日常生活の事や趣味、日本文化あるいは日本の観光名所について等、多岐にわたるものだった。より詳しく述べると、お勧めしたいフランスのグルメや自身が現在住んでいる町の事、そして日本各地の観光名所や趣味について話してくれた。

これらはどれも町の事や今皆で取り組んでいるお茶摘みのことでもない内容の会話である。しかし、この自由で多様な会話が、筆者達と参加者の交流を創出したと見て取れる。

続くお茶揉みという作業を体験するときにも、上記のような何気ない会話でゲストとの交流が生まれた。摘んだお茶の葉を熱しながら両手の手のひらですり合わせ、揉むという

作業行程の体験で、これは二つのグループに分かれて行われた。プレートを使っての作業のため、どうしても体験する人と体験を待つ人が出てくる。数人のゲスト達が体験している間、筆者は自身の順番が来るまで、後方でその様子を見ながら待っていた。すると、同じく順番待ちをしていた、お茶摘みで親しくなったフランス出身のゲストと目が合った。そして、ここからまた何気ない会話が始まった。フランスでも英語を使用するようで、お茶の「tea」を初めとする英語の本場の発音を教わった。まず、ゲストが発音してそれを筆者が繰り返すという、まるで英会話の授業のようなやり取りが行われた。お茶揉みに取り組み人がある一方で、筆者とゲストは全く別の空間を作り出していたのである。お茶揉みに夢中になる前に、互いの待ち時間を利用して生み出した会話に夢中になっている状態だった。このやり取りから筆者は、待ち時間があることで、逆にそれがゲストを縛らない、ゲストにとって自由な時間となり、そこでこそ参加者同士やスタッフとの何らかのやり取りが創出される可能性があることを理解するに至った。

そしてゲスト同士の間でも、やはりこの待ち時間もしくは休憩時間という縛りのない空間によって交流が起こった。お茶揉み体験終了後の事である。筆者達スタッフが昼食の準備中に、ゲスト達は当プログラム主催者宅の客間に誘導された。そして、いくつかのテーブルに分かれて着席した。それぞれが自由な場所に座ったこともあってか、ここでゲスト同士の交流が始まった。ゲスト達は初対面であるにも関わらず、日本語だけでなく母国語や英語を使って、テーブルを囲んで隣人との会話に夢中になっていた。隣人に何か教えていそうな会話やそれぞれが思い思いに語り合っただけで皆で笑っている様子が見て取れた。これも、短時間ではあるが、ある程度定められたプログラムとは別の、ゲスト達だけの空間があったからこそ発生した交流であることが考えられる。

この事例のキーワードは、「何気ない会話」と「縛りのない自由な時間」と言える。もてなす側と参加者、そして参加者同士の会話や交流は、時間もやるべきことも定められていない、プログラムの中では待ち時間や休憩時間に相当する時間の中で行われていた。またその内容は、決してお茶の事やプログラムの事に限るのではなく、それぞれの日常や現在住んでいる所のことというように、多様な内容のものだった。このプログラムは、それぞれがこれまで得てきた経験や知識を他者と共有し合い、そこから新たな見方や情報を取得する機会にさえなっていたことが見て取れる。

この事例では、お茶の文化体験がきっかけとなって親密な交流が発生した。参加者達は、最初は普段体験したことのないお茶摘みやお茶揉み等の方法に少し戸惑いを見せつつも、次第にその作業の流れに慣れていく。気持ちに余裕が出来てきた時、人々の行動は次の段階へと移行する。それが、近くの人との会話だった。特に時間も短く区切られているわけでも、スタッフ側からの一方的な解説がなされるわけでもない自由な空間は、軽く相手に声を掛けるところから始まり、更に多様な会話を生み出す機能を果たしていた。

そして、このような機能を果たせたのは、当プログラムが、限られた時間の中で地域の魅力を出せる限り多く詰め込んで紹介することを優先した、もてなす側主導のプログラムでなかったことが大きく関係している。ある程度自由な時間を設定し、ゲスト達との交流に重きを置いていたプログラムだったからこそ生まれた交流だと見て取れる。

ゲスト達は、観光地域に関する情報や知識だけを期待しているとは言い難い。それ以外の、他者と自身のありのままの姿を知ることや語り合うこと、そしてそういった自由な交

流を味わうことの出来る時間を、普段とは異なる空間の中で経験できることを求めていることが、上記の事例から読み取ることが出来る。

次項では、前項の明日香村における事例も併せて、先行研究の成果も踏まえながら、事例から読み取れたゲスト側の着地型観光事業に対する姿勢の実態についての分析を行う。同時に、先行研究との相違点や、これまでは捉えられてこなかったが、観光地の現場では確認することの出来る側面にも視点を当てての分析を試みる。

4-3 先行研究と事例分析結果との比較

ここまで、着地型観光事業に参加するゲスト側の視点に立ち、ゲスト側の人々の姿勢の実態を明らかにしてきた。本項では、先行研究を踏まえつつ、着地型観光事業が取り組まれる現場におけるゲスト側の人々の実態についての分析をまとめると共に、先行研究と現場の実態の相違点から、これまでの研究で見落とされてきた視点を指摘したい。

先行研究のほとんどは、着地型観光事業の事例を挙げる際、もてなす側の視点に立っての記述がなされる傾向にある。そこでは、参加者の誰もがそのプログラムを受け入れ、無意識のうちにそれを楽しみ、打ち解けているような光景が紹介される。

しかし、上記の事例のように、ゲストとの交流を経た時、これまでの研究では捉えられてこなかったいくつかの点を確認することが出来た。

まず、もてなされる側の参加者達が、訪問地の観光プログラムに打ち解ける瞬間は、何もその地域に関する説明や名所を見学する時だけに限られていないということである。明日香村のあすか歴史探検隊では、明日香村の歴史や文化、遺跡に関する歴史ガイドとは違って、参加者達とのごく普通の会話を中心に、ホスト・ゲスト間でのやり取りが行われた。

これまでの研究で挙げられてきた事例の多くは、いかにゲスト達に飽きられることなく、地域の事を効率よく、そして分かりやすく伝えられるかについての方法や注意すべきことについての考察がなされてきた(例えば川良2007、大社2008)。しかし、実際の現場では、それらとは真逆の、まるで日常生活の中で友人たちとの間で交わされるような「何気ない会話」があることで、ゲスト達は自ら観光プログラムに打ち解けようとする傾向があることを確認するに至った。このように、観光地に関する会話やプログラム内容だけに限らず、実はいつもと変わらない「何気ない会話」もまた、ホスト側の地域とゲスト側の参加者の交流を深める機能を果たしているのである。

さらに宇治田原町での観光プログラムでは、この「何気ない会話」が生まれる機会をホスト側が敢えて積極的に設けようと取り組んだことで、ホスト・ゲスト間だけに限らず、ホスト間そしてゲスト間でも交流が盛んに行われた。これは、ホスト側とゲスト側の人々の間で、互いに交流を楽しみながら、みんなの力を合わせてお茶の文化体験をすることを主軸としていたからこそ、どの立場に立つ人でも、この観光プログラムに自ら打ち解けていく様子を見て取ることが出来たと言える。プログラム主催者側の人々が力を入れた、「縛りのない自由な時間」こそ、上記の「何気ない会話」を生み出すことにつながっているのであり、この仕組みが上手く機能することで、ゲスト側の人々が自らの意志を持って、着地型観光事業に意欲的な姿勢を抱くことが考えられる。

次に、観光客達に地域で楽しんでもらうために取り組むべきことや、地元の良さを効率よく伝えるために、そして観光客達に興味関心を持ってもらえるために必要なことについて

での研究が、これまで、多くの研究者達によってなされてきた。そのほとんどは、ホスト・ゲストが交流を深める上で、地域の特色や伝統文化を活かした内容を活用することが前提とされてきている。それら地域に関する内容を主軸とすることで、地域の魅力を広めると共に、その地域で過ごす時間をより良い時間とすることで、地域へのファンを増やそうと試みるといった内容の考察が多く見られる(例えば古池2011、藤野・高橋2014)。

一方で、現場では、上記で見てきたような「何気ない会話」とそれを創出する機会としての「縛られない自由な時間」が、実はホスト・ゲスト間の交流を深め、双方の立場の人々が着地型観光に対し、より意欲的な姿勢を抱く可能性が高いことが見受けられた。それらは必ずしも、話の内容に観光地の魅力や特色が含まれているものではない。普段の生活の中で家族や友人たちと何気なく話す会話と変わらない、自然な会話によって創出されるものである。意外にも、観光プログラムの現場では、これら観光地に関わりを持たない自然な交流が、ホスト・ゲスト双方をつなぐ役割を果たしていたのである。さらに、「縛られない自由な時間」があることによって、参加者に対し、一時的にプログラムの行程から離れて自由に行動する選択肢を与えることにつながり、参加者に窮屈さを抱かせることを防ぐ役割も果たしていると言える。

ここで注意したいのは、観光プログラムの舞台となる観光地や、プログラムを構成する名所や地域の魅力が、何の役割も果たしていないという訳ではないことである。その地域にしかない特色や景観、名所がホスト・ゲストの交流の仲介役としてそこにあることで観光プログラムは生まれる。そして、その観光プログラムが取り組まれることで、観光地に人が集まり、ホスト・ゲストの間で上記のような交流が創出される。その交流を経て、人々は着地型観光事業に対して意欲的な姿勢を示すことにつながるのである。「縛られない自由な時間」の中で、ホストとゲストが「何気ない会話」によってより強い関係性を生み出し、その地域の着地型観光に双方の立場の人々が打ち解けて行く。この流れの基盤となるところが、観光地に存在する名所や特産品、景観といった地域の魅力・特色であると言える。

先行研究では、着地型観光を機会にして、観光地の効率的なPR方法や参加者達を飽きさせることなく地域の特色を解説するための方策を提案することが多い。しかし、今回見てきたように、ゲスト達はその地域の観光プログラムや事業に打ち解けてゆくには、何もその地域でしか得られないような話や体験だけがポイントとなるのではなく、観光地という空間で繰り返される、普段の「何気ない会話」と「縛られない自由な時間」もまた重要な役割を果たし得る可能性が存在している。今回の事例分析を経て筆者は、公式化が進む先行研究ではあまり捉えられてこなかったこの二つの側面もまた、今後の着地型観光のあるべき姿を考える上で重要なキーワードとなるのではないかという考えに至った。

第5章 総括

本研究では、観光地の現場において実は目にすることの出来るホスト・ゲストの交流の実態を基に、これまでの着地型観光に関する研究が見落としている盲点を指摘してきた。

まずは、現在も事業に取り組む桜井市観光まちづくり協議会へのヒアリング調査から、ホストがどのような姿勢で着地型観光事業に取り組んでいるかに注目し、分析を行った。

その結果、「地域ぐるみの情報発信」と「地元住民の地域の再認識」がポイントであり、一部の住民だけが地域の魅力を伝えようとするよりも、地域住民が一つとなって地域の魅力への理解を深め、外部に情報発信できるよう取り組もうとする姿勢が浮かび上がった。そしてそれは、従来の研究でも触れられてきたような、地域住民一人一人がもう一度地域を見つめ直すことで、何らかの形で情報発信の機会を得ることにつながるという捉え方と重なりを持っているものだった。つまり、現場において確認されたこの姿勢は、これまでの研究でも重視されてきた、着地型観光を考える上では欠かせない部分であることが分かった。

同時に、地域の観光事業に自ら興味関心を抱くことのない、一般の地域住民達の意見や姿勢も明らかとなった。日常的でプライベートな空間に知らない人がやって来ることに不安を抱く人もいれば、地域外での仕事や勉学に時間を必要とする地域住民もいるかもしれない。また、地域で働く中で観光客達と接点を持つ人にとっても、業務の一環として、観光客を迎えているという状況も考えられる。先行研究は、観光事業に意欲的に取り組む人の視点での議論が展開されやすい傾向が見受けられたが、視野を広げれば、それとは別の立場の人々が存在することも見えてきた。これらの立場の人々にも視点を当てた研究が、まだまだ少ないのと同時に、現場の実態を広く捉えられないまま、着地型観光成功への方法論やポイントなどが論じられていることに気づかされた。

また、本研究では、ホストの姿勢とゲストの行動の実態を分析することで、交流が成立する際の要件として以下の二つのキーワードを抽出した。

一般的には、ホスト側が用意したプログラムに組み込まれた体験メニューに自然と打ち解け、交流を楽しむゲストの姿が紹介される傾向がある。これまで見てきたように、二つのプログラムの経験から、筆者は、「縛られない自由な時間」によって生み出される「何気ない会話」がホストとゲストの交流を弾ませるきっかけとなることも確認した。どちらも、最初から最後まで、その観光地についての説明や案内が主軸とされるのではなく、ホスト・ゲストが、話したいときに話し合える機会を設けることを目的としたものだった。観光地の名所や歴史に関する話題に限定せず、自然な会話の出来る空間を創出しようと試みることで、「何気ない会話」が生まれる。そして「何気ない会話」によってホスト・ゲスト間に、その地域に来なければ実現しなかった交流が生まれることも確認するに至った。ただし、「縛りのない自由な時間」を重視していても、参加者の過ごし方には多様性が見られた。中には参加者同士の交流やホスト側との交流に一呼吸おいて、自身のペースで周辺の景観を眺め、見てみたいところを個人で自由に見物して楽しむ参加者の姿もあったのが実態だった。つまり、ゲスト側全ての人が、観光プログラムに参加したからには、それに打ち解けていることを前提としてしまうのではなく、あらゆる立場の人がいることに目を向ける必要があるだろう。

これまで見てきた通り、現場に目を向けてみると、そこには、従来の研究がまだまだ捉えきれない多様な要素が存在しており、盲点となっている。着地型観光は、実は様々な要因が折り重なって成り立っているのであり、この多様性を見落として議論を進めると、それはホスト・ゲストの実際の姿を見落としていることになる。だからこそ筆者は、これまでの研究で説いてきた部分を着地型観光研究の基盤として捉えると共に、そこから一步視野を広げてみる必要があると考える。

参考論文

- ・井口貢（2007）「地域のブランド化とまちづくり文化の形成」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・井上芳郎（2007）「豊岡におけるアントレプレナーシップ—地元産品を中心に繰り返し広げられるベンチャー・スピリット—」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・小野由理（2007）「官民連携による地域再生と「地域ブランド」の確立—エリアマネジメントの観点から—」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・川良真理（2007）「まちを歩くことはまちを磨くこと—「長崎さるく博'06」が残したもの—」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・喜多俊之（2007）「未来をデザインする都市ブランド戦略」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・栗本智代（2007）「地域ブランドを活かし、持続可能な都市へ」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・須栗大（2015）「観光産業を中心とした地域活性化に関わる研究の現状」『中京大学経営学部研究紀要』 22, 69-73, 2015-03-20
- ・陶山計介（2007）「都市再生のブランド戦略」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・立松信孝（2005）「観光を支える社会システムとしての鉄道産業—観光からみた役割と今後の展望—」『鈴鹿国際大学紀要 Campana』 12巻, 45-69
- ・豊田尚吾（2007）「地域ブランドの課題と可能性 課題に応じた地域ブランド構築を」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・羽田耕治（2007）「観光まちづくりにおける地域ブランドの要素と役割」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・原楫（2007）「食と農に根ざした地域のブランド力とは—郷土食の伝承を通しての食育—」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・二神真美（2010）「観光圏の整備と着地型観光の事業開発に関する一考察」『名古屋商科大学総合経営・経営情報学部論集』 54 (2), 235-240, 2010-03
- ・細野助博（2007）「地域力をブランドに—愛着と憧れの生まれるまちづくり—」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・前田弘（2007）「イングランド・湖水地方のブランディング」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』

- ・宮本倫明 (2007) 「まちづくりにおけるブランドの潜在的可能性と意義」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・森重昌之(2009)「着地型観光による地域づくりに必要な地域の条件」『北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集』 5：103-111, 2009-03-10
- ・矢作弘 (2007) 「まちの固有性を生かす「ミクロの都市再生」」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・四元正弘・栗本智代対談 (2007) 「「地域ブランド」の魅力と、その可能性」『Culture, Energy and Life/Vol.80 March 2007 特集：まちづくりと地域ブランド 大阪ガス エネルギー・文化研究所』
- ・米田晶 (2015) 「着地型観光研究の現状と課題」『関西学院大学紀要論文 経営戦略研究』 vol.9, 21-32, 2015-09-30

参考文献

- ・井口貢編著(2011)『観光文化と地元学』古今書院
- ・大社充 (2008) 『体験交流型ツーリズムの手法—地域資源を活かす着地型観光—』学芸出版社
- ・大社充 (2013) 『地域プラットフォームによる観光まちづくり—マーケティングの導入と推進体制のマネジメント』学芸出版社
- ・須田寛(2017)『日本の観光きのう・いま・あす—現場から見た観光論』交通新聞社新書
- ・須田寛(2006)『新しい観光—産業観光・街道観光・都市観光—』交通新聞社
- ・高橋一夫、大津正和、吉田順一編著(2010)『1からの観光』碩学舎
- ・中尾清(2012)『地方観光政策と観光まちづくりの展開』晃洋書房
- ・古池嘉和 (2011) 『地域の産業・文化と観光まちづくり—創造性を育むツーリズム—』学芸出版社
- ・安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著(2011)『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房
- ・山下晋司編著(2011)『観光学キーワード』株式会社有斐閣

参考・引用ホームページ

- ・明日香村商工会, 教育旅行
<http://web1.kcn.jp/asuka/2/inbound.html> (2017/12/21 アクセス)
- ・位置 | 宇治田原町
<http://www.town.ujitawara.kyoto.jp/0000000058.html> (2017/12/21 アクセス)
- ・宇治田原町茶恋G隊—ホーム | Facebook
<https://www.facebook.com/%E5%AE%87%E6%B2%BB%E7%94%B0%E5%8E%9F%E7%94%BA-%E8%8C%B6%E6%81%8BG%E9%9A%8A-549229205234193/> (2017/12/21 アクセス)
- ・観光・文化財情報/桜井市ホームページ
<http://www.city.sakurai.lg.jp/bunkazai/> (2017/12/21 アクセス)

- ・市の紹介(市の概要) / 桜井市ホームページ
<http://www.city.sakurai.lg.jp/shisei/cityprofile/cityprofile/1393822731687.html>
(2017/12/21 アクセス)
- ・ソーシャルイノベーション宇治田原—ホーム | Facebook
<https://ja-jp.facebook.com/%E3%82%BD%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%AB%E3%82%A4%E3%83%8E%E3%83%99%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3%E5%AE%87%E6%B2%BB%E7%94%B0%E5%8E%9F-534392316723142/>
(2017/12/21 アクセス)
- ・茶ッピー未来基金プロジェクト | 宇治田原町
<http://www.town.ujitawara.kyoto.jp/0000000223.html> (2017/12/21 アクセス)
- ・日本緑茶発祥の地 | 宇治田原町
<http://www.town.ujitawara.kyoto.jp/0000000145.html> (2017/12/21 アクセス)
- ・まちの Mascot 茶ッピー | 宇治田原町
<http://www.town.ujitawara.kyoto.jp/0000000222.html> (2017/12/21 アクセス)
- ・まちを育てる・変えるこれからの観光 | 特集 | グループ情報誌『Link』 | JTBグループ10.
民博と交流体験の教育旅行プログラムで着地型観光を定着
<http://www.jbgroup.jp/link/special/230-10.html> (2017/12/21 アクセス)